

「内向き日本」と「今そこにある課題」

住吉 邦夫 *Kunio Sumiyoshi*

(財)国際貿易投資研究所 専務理事

近年、日本が様々な分野において「内向き」になって来ていると感じているむきは多いのではないだろうか？

日本が内向きになっている背景は色々考えられる。バブル経済崩壊以降の長引く経済停滞により社会全体に沈滞ムードが漂い、外にまで目が向かなくなって来ていることがあるのであろう。また、一部の分野を除きそれなりに大きな日本の国内市場に安住している言った側面もある。

こうした事から、現在の経済停滞を抜け出せば日本は再び世界に目を向ける様になるという見方もできる。しかし、そこに落とし穴は無いのであろうか？

現下の日本の置かれた状況を見れば、経済・社会は「グローバル化」が進展しており、更にそれが加速化しつつある。また、「アジアの時代」と言われる昨今、アジアの活力を取り込みつつアジアと共に成長して行くことが一層必要となっている。さらに、少子高齢化・人口減による国内市場の限界もあり、産業のさらなる海外展開が必要となっているのである。こうしたグローバルなメガコンペティションと云った状況下には、海外に積極的に打って出る攻め型の、グローバルに活躍できる人材や外国語人材の活躍が必要である事に異論をはさむ余地は無いであろう。

ところが、これからのこうした日本社会を背負うべく若者たち

が、海外に出る事にあまり関心を持たない傾向にあると聞く。一例を挙げると、ハーバード大学の学部・大学院への日本人留学生数は10年前と比べ大幅に減少しているそうである。海外留学生の減少は、ハーバード大学だけに留まらず、全米の大学で起こっている。一方近年の我が国の対外経済関係を反映して中国向けは増えているものの、海外留学生の全体数としてはこの所、減少傾向が続いているのである。

こうした現象に対して、今の若者は日本国内にいた方が「安心」、「安全」、「便利で居心地が良い」などと考えているからだと言った説明を良く聞く。また、所得が減っているので留学費用を捻出しにくいといった事も影響していよう。

他にも様々な理由が有ると思うが、一例として若者を受け入れる企業側の対応について考えてみよう。当然、企業としてもグローバルに活躍できる人材は必要であると言う認識は持っている。しかしながら、現実には「海外留学経験者」を社内で必ずしも十分に生かし切れていないケースが少なからず見られるのではないだろうか。企業にもよるが、人材活用という面で「内向き」傾向が幾分かでも残っていないだろうか。企業に就職しようとする若者にとって海外留学が自分の将来にとって有利になると考えるようになれば海外留学生は増えていくであろう。勿論、グローバルな人材は海外留学だけでは育成できないが、有効な人材育成のツールの一つとしてこれまで以上に活用し、留学経験者を企業内でこれまで以上に登用して行くことが重要だと考える。

さらに言えば、企業だけでなく国の戦略としても、経済的な面も含めて、若者にとって海外留学がしやすい環境を一層充実することが急務である。人材の育成には時間がかかる。日本が今置かれている状況を考えれば「今そこにある課題」である。